
青よりも、蒼よりも……

葉月 七歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青よりも、蒼よりも……

【Nコード】

N1018Q

【作者名】

葉月 七歌

【あらすじ】

？青い空は、嫌いだ。

雲がないなら、なおさら？

そんな、学校をさぼった？私？の、ほんの一時の物語。

青い空は、嫌いだった。
雲がないなら、なおさら。

その見事に嫌いな天気を、この無駄に暑い週の初めは再現してくれている。

学校をサボり、家にもいたくなかった。でも、外をぶらついているのは失敗だったかもしれない。

陽炎は揺らめいているし喉は渴くし。ただ当てもなく、黒くて暑いだけの道は、思ったより生き地獄だった。犬や猫の姿もない公園を見つけた時の虚しさといったら、溜まったものじゃない。

そうやって思い出させられるのは、今日の最高気温。リフレインする数値は、アナウンサーや気象予報士のお言葉によれば、「初夏というより真夏日突入」。

噴水のある公園で涼めたらいいのに、ここは敷地を示す囲いから、砂もお粗末なほどに硬い地面のグラウンドさながらの敷地内へと、静かに生きる場所を伸ばそうとする緑達ぐらいしかない。相変わらず、少年サッカーやお年寄りのグラウンドゴルフしかできなさそうな世界だった。無味乾燥って、こういう時に使うのかななんて考えてしまう。

池もない。ただ囲いと木々が少々。雑草だらけの空き地のような場所にやってきた私は、他の人から見れば絶対暇人にしか見えないに決まっている。

近くで缶を拾い集めているらしい物乞いのおじさんだつて、せいぜい私の手の中の、後は熱せられるだけな空き缶に興味を示すぐらいのはずだ。でも、遠目でも錆びていそうなママチャリいっぱい空き缶があるあの様子だと、手荷物が増えるからと、断られるのかもしれない。

木は、真下の地面にくつきりと、葉の模様で黒と白っぽい土色で天国を作っている。

興味の無い振りをするか、さっさと入ってしまったか、一人で妙な誘惑に惑わされる。

無理だった。

勝とうなんて思えない。紫外線から体を守ってくれる自然の傘の下に入らないで、どうやってこの汗を少しでも抑えられるんだろう。足が勝手に木陰へと向かう。手の中のオレンジジュースは尽きて、帽子もない。真つ黒髪に真つ黒目の私は、同じ黒でも選んでいいなら、ビバ木陰って叫んだって構わない。生存本能を満たさないで、何が生き物だ。

そう思っているにも、いざその黒こかげに飛び込んでいこうとすれば、目に入るのは野生を忘れたようにうつ伏せの犬の字で寝転ぶチャトラの猫の姿。

いやがったのかとしか思えなくて、けど引つかかれたくもなくて結局、負け犬のようにおとなしく、猫の隣にちょこんと座るしかできなかった。猫からすれば図体でかいつていうより、巨人みたくに見えるはずなのに、猫は全く気にしていないみたいだった。

「態度悪……」

チャトラは夏毛を風に撫でさせて、体毛で波を作っている。本当に気にしている様子がない。

体毛が波打っているのを見ているうちに、私はふいと視線を外した。……団地だけを見れば、空は意外と隠れていた。

生温い風は、排気ガスマみれのまずい空気をどこへ運んでいくんだろう。

その生温くてまずい空気を吸って、こんな小さな体で小さな肺しかない猫や、こんな車の音が近い場所の木には、毒なんじゃ……。

「ねえ、苦しくないの？」

……あ、尻尾が揺れた。

ちよっとだけ、おもちゃのステッキみたいに尻尾の先だけカーブ

させる猫を見て、私は思わず笑った。

そりゃそうよ。人間だったら、なんだって鳥を捕まえにくくて暑い場所が好きなの？　なんて言いそうな感じに見えた。

「残念でした、私鳥肉より牛肉好きなんだ。暑くっただって飲み物飲んだりクーラー当たればいいもん」

また、ちよつとだけ尻尾が動いた。左から右へ、またステッキみたいなカーブ。

えー、外でお昼寝すればいいじゃない。町中芝生と木陰があれば十分だわ。

「んー、昔は好きだったんだけどね……空、青いでしょ？」

猫の瞼がちよつとだけ、眠たそうに開いた。チャトラは緑の目なんて考えがあつたけど、思った以上に黄色い目だった。……大きな目ってかわいい。

「青いのつていや。海みたいじゃない。……海より明るいけど、いや」
だんだん、味気ない乾ききった地面のほうへ目が行ってしまふ。

強い光を跳ね返した色が、もうすぐ海開きの季節だと知らせてくるようだった。

段々と、それが砂浜を思い起こさせて

段々と、それが浜辺で壊れていく波を思い出させて。

「……ねえ、猫って水嫌いなんだよね。海とか、入ろうなんて思わないよね」

なんの返事もくれなかった。ただ尻尾が、左右にゆっくり、たまに止まりながら振られるだけ。

なんとなく淋しくなつて、笑いながら木を見上げるようにして笑う。

「いいよねえー、猫に生まれたかったなあ」

青も嫌いじゃないままでいられたのかもしれない。

海を怖がる事もなくて、最初から嫌いではいられたのに。

「……私、ずるい？　お姉ちゃん死んだからって、海とか青とか嫌うのって……ずるい？」

猫は答えてくれない。さっきみたいに、尻尾で伝えてくれたりはしてくれない。

ふと、笑いで細くなった視界を、瞼の力を抜いてはっきりと捉えた。

蒼。

蒼で、蒼で、藍あおに染まる天空。

どこまでも高く、底がない色。

きつと、どこかで藍あおだけの世界になって、どんどん紺になって黒になって、光がない場所になって。

……そんなに暗い場所で、お姉ちゃんはひとりで苦しんだんで、教えられているみたいになる。

空が、水面みたいにゆらゆら揺れたりしないって、分かっているも。

「いいね、君……気ままに生きていきたいな、私も」

週の初めから学校をサボるなんて必要もない。それで後ろ髪引かれるなんて考えなくていい。

暑いから文句を言うなんて、慣れちゃえばきつと言う気も失くしてしまえる。

あの人達にお姉ちゃんと重ねて見られるような事だって、それを億劫に感じる事だって、きつと忘れてしまえる。

重圧全てを振り払う気はないけれど、それでも、爆発させないままいるのは、正直……辛い。

それで猫に逃げるなんて、なんて？人間？らしいんだろう。

急に左手に、ふわふわとした感触が来て驚いた。さっきのチャトラが擦り寄ってきている。首の下を搔いてやると、人馴れしているらしくて、甘えた声を出してきた。

「愛され気質なんだね、君」

ここ搔け、ここ搔け。

そう言いたそうに頭を動かすチャトラ。ご要望にお答えしましよつか、なんてかっこつけて、搔いてほしそうな場所へ指を運ぶ。最

初の態度の悪さを忘れそうになるくらい、意外と可愛い奴め。

よく見ればオスだ。おかま口調に勝手にしちやっとなあと思いつつ、撫でて笑う。

少しして立ち上がる。チャトラが見上げてきて、私は微笑んだ。

「またね、トラ君。ありがと、ガッコ行ってみるよ」

猫はまだ物足りなさそうに、足元に擦り寄ってくる。

もう一度撫でてやろうとすると、自分から鼻を私の手に摺り寄せてきた。

頑張れ、ファイト。

そう言ってくれたように感じる。

公園を出て、私は伸びをした。視界が自然と上を向いて、見えてくる真っ青。

空は嫌いだ。雲がないなら、なおさら。

でも。

茶色は……好きかもしれない。ふわふわとした茶色なら、なおさら。

後ろを振り返り、木陰に戻ったチャトラを見て、思わず吹き出した。

大の字で寝る猫なんて、初めて見た。

(後書き)

こんにちは、です。読んでくださってありがとうございます。初めて文学風……なのかな？ 一人称っぽい視点で描いてみました。普段長編ばかりなので短編は緊張します、はい(苦笑)。

小説を書き始めて六年と言っても、まだまだがつきそうな六年です(汗)。

ええと、これは専門学校の体験入学に行った際、作成したものに加筆修正したものです。四半期前ぐらいなので、今の文章にも割と近い……と思いたいです。

感想、アドバイス等いただけましたら幸いです。それでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018q/>

青よりも、蒼よりも.....

2011年1月11日11時40分発行